

# 辻 遺 跡

県営ほ場整備事業（新本地区）に伴う発掘調査1

令和3（2021）年3月

岡山県総社市

# 辻 遺 跡

県営ほ場整備事業（新本地区）に伴う発掘調査1

令和3（2021）年3月

岡山県総社市

## はじめに

総社市内には、先人が残した多くの遺跡が存在しています。しかし、まだまだ明らかになっていない遺跡が多数あります。

総社市内で初めて集落遺跡が明確になったのは、中央区画整理事業の工事中に発見された真壁遺跡です。総社市の西部、高梁川右岸にある新本川流域でも、多くの古墳群の存在が知られていましたが、その主体となる集落跡については確認されていませんでした。

昭和 50（1975）年代後半になり、大型機械による大規規模耕作を目的とするほ場整備事業が本格化して、従来開発の対象とならなかった農地も大きく改変されることとなりました。総社市においても新本本庄地区でⅠ期・Ⅱ期にわけたほ場整備事業が実施されることとなりました。

そのため、昭和 56（1981）年度に第Ⅰ期工事範囲の遺跡確認調査を実施し、その結果とともに発掘調査を開始しました。

今回、最初に調査を実施した辻遺跡では、鎌倉時代における集落の一端を知ることができました。

平安時代に岩清水八幡神社の荘園であった田上莊は、現在の総社市新本地区にあたります。また新本地区には赤米を神事に祭る国司神社があるなど、稲作を通じた農村が長く展開してきた地域といえます。辻遺跡はその農村の変遷の一端を知る貴重な遺跡といえます。

本調査にあたり岡山県教育庁、関係機関ならびに設計業者、工事関係者、地元をはじめ発掘調査に協力していただいたみなさまにも厚く御礼申し上げます。

令和 3（2021）年 3月

岡山県総社市

## 例　言

- 1 この報告書は、岡山県教育委員会の指導により総社市教育委員会が発掘調査を実施した報告書である。
- 2 発掘調査は、総社市教育委員会が昭和 58（1983）年 1月 10 日から 2月 9 日まで実施した。  
調査面積は約 1,000m<sup>2</sup>である。（1月 19 日から一倉遺跡と並行調査）
- 3 発掘調査は、総社市教育委員会 谷山雅彦・高田明人（社会教育課 当時）が行った。  
発掘作業員は以下のとおりである。

河崎秀夫・小野健太郎・永田 豊・小野節子・別府 優・川村 正・鎌田伊吉・坂本 忍・  
川村節子・金谷富志
- 4 報告書作成にともなう図面整理、遺物実測は、谷山（文化課臨時職員 当時）が行った。
- 5 遺構図の浄写は、平成 27（2015）年度から平成 29（2017）年度に行なった。
- 6 本書の執筆は、総社吉備路文化館館長 谷山が文章と遺構図・遺物図の作成を行い、観光プロジェクト課主査 前角和夫が遺構写真の選択・遺物写真の撮影および全体編集を行って、観光プロジェクト課にて校閲・校正したものである。
- 7 発掘調査で出土した遺物、発掘調査および整理作業において作成した遺構・遺物の実測図や写真等の記録類は、総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手 265 番地 3）にて保管している。
- 8 本書の刊行にあたり御指導・御協力頂いた関係機関ならびに関係各位の皆様に厚く御礼申しあげます。

## 凡　例

- 1 この報告書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
- 2 使用した地形図は国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地図を複製したものであり、その他は総社市発行の地形図を一部改変したものである。

## 目 次

はじめに

例言・凡例

目次

### 第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	1
第3節 調査の経過	6

### 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7

### 第3章 調査の概要

第1節 調査の概要	9
第2節 堀立柱建物・構列・柱穴ほか	12
第3節 土壙墓	16
第4節 井戸	19
第5節 溝	21

第4章 まとめ	23
---------	----

付載1 新本ほ場整備予定地調査報告（抜粋再録）	27
-------------------------	----

付載2 新本庄地区 県営ほ場整備事業発掘調査遺跡の概要	29
-----------------------------	----

1 一倉遺跡	29
2 長瀬遺跡	32
3 小原遺跡	33
4 田畑遺跡	34
5 植荷遺跡	35

報告書抄録	38
-------	----

## 図 目 次

第1図 新本ほ場整備に伴う確認調査位置図 (上:第I工区 左下:第II工区) (S=1/10,000)	2	第16図 井戸 平・断面図 (S=1/30) と 出土遺物 (S=1/4) ..... 19
第2図 平成19(2007)年発行「能社市遺跡分布図及び 手引き」から (S=1/33,000) ..... 3		第17図 溝2 平・断面図 (S=1/40) ..... 22
第3図 位置図 (S=1/240,000) ..... 7		第18図 溝2 断面図 (S=1/20) ..... 22
第4図 調査地範囲図および位置図 (S=1/50,000) ..... 8		第19図 溝2 出土遺物 (S=1/4) ..... 22
第5図 調査地位置図 (S=1/1,500) ..... 9		第20図 土師質椀法量変遷図 (S=1/4) ..... 24
第6図 辻遺跡全体図 (S=1/250) ..... 10		第21図 辻遺跡 土師質椀法量 ..... 24
第7図 溝1 断面図 (S=1/40) ..... 10		第22図 鹿田遺跡 土師質土器椀法量 平均値 ..... 24
第8図 東部の遺構配置図 (S=1/80) ..... 11		付載2
第9図 掘立柱建物1 平・断面図 (S=1/80) ..... 13		第23図 一倉遺跡 調査範囲図 (S=1/2,000) ..... 29
第10図 掘立柱建物1 出土遺物 (S=1/4) ..... 13		第24図 A地区 遺構配置図 (S=1/500) ..... 30
第11図 掘立柱建物2 平・断面図 (S=1/80) ..... 13		第25図 B地区 遺構配置図 (S=1/500) ..... 30
第12図 柱列 平・断面図 (S=1/80) ..... 13		第26図 C地区 遺構配置図 (S=1/500) ..... 30
第13図 柱穴 出土遺物 (S=1/4) ..... 13		第27図 長瀬遺跡 遺構配置図 (S=1/500) ..... 32
第14図 柱穴・溝 出土遺物 (S=1/4) ..... 14		第28図 小原遺跡 遺構配置図 (S=1/500) ..... 33
第15図 土壙墓 平・断面図 (S=1/20) と 出土遺物 (S=1/3・4) ..... 17		第29図 田畠遺跡 遺構配置図 (S=1/500) ..... 34
		第30図 稲荷遺跡 遺構配置図 (S=1/500) ..... 35

## 写 真 目 次

写真1 確認調査 地点13		写真16 井戸 出土遺物 ..... 20
トレンチ13-1 北(西から) ..... 5		写真17 溝1 (西から) ..... 21
写真2 確認調査 地点13		写真18 溝2 出土遺物 ..... 21
トレンチ13-2 北(北から) ..... 5		付載2
写真3 辻遺跡 調査区全景(東から) ..... 6		写真19 A地区 全景(東から) ..... 31
写真4 掘立柱建物1 (東から) ..... 12		写真20 B地区 全景(南東から) ..... 31
写真5 掘立柱建物1 遺物出土状況(東から) ..... 12		写真21 B地区 壺穴住居(北から) ..... 31
写真6 掘立柱建物2 (東から) ..... 12		写真22 長瀬遺跡 掘立柱建物群(北から) ..... 32
写真7 柱列(東から) ..... 12		写真23 長瀬遺跡 壺穴住居群(北から) ..... 32
写真8 掘立柱建物1 出土遺物 ..... 14		写真24 小原遺跡 北区 全景(南東から) ..... 33
写真9 柱穴 出土遺物 ..... 14		写真25 小原遺跡 南区 土坑(北から) ..... 33
写真10 柱穴・溝 出土遺物 ..... 15		写真26 田畠遺跡 左:掘立柱建物群(北から) 右:發掘調査時 ..... 34
写真11 土壙墓(東から) 左:確認調査時 右:発掘調査時 ..... 16		右:壺穴住居群(南から) ..... 34
写真12 土壙墓 左:人骨出土状況(南から) 右:出土人骨 ..... 16		写真27 稲荷遺跡 壺穴住居群(東から) ..... 36
写真13 土壙墓と区画溝(西から) ..... 17		写真28 稲荷遺跡 壺穴住居群(東から) ..... 36
写真14 土壙墓 出土遺物 ..... 18		
写真15 井戸(北西から) ..... 19		

## 表 目 次

第1表 第I工区 確認調査結果 ..... 4		第4表 遺物観察表2 ..... 26
第2表 第II工区 確認調査結果 ..... 4		第5表 遺物台帳 ..... 37
第3表 遺物観察表1 ..... 25		

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

国内では昭和38（1983）年に制度化された「ほ場整備事業」により、土地改良事業が推進された。昭和45（1980）年ごろにはトラクターを中心とした機械化体系も完成した。こうした農業の機械化が大型化し、全国的には場整備が進むなか、総社市においても事業計画が検討された。

その一つとして新本川右岸の本庄地区を中心に、平野部・谷部を含む63haに及ぶ5か年の事業計画が、昭和57（1982）年4月に県営事業として採択された。

計画地内に既知の遺跡は存在しなかったが、歴史的・地形的にみても遺跡の存在が想定されることから、昭和56（1981）年9月に発掘承諾が得られた水田28か所において確認調査を実施した。このうち8か所において遺構を検出した。

その後、昭和55（1980）年から実施していた真壁遺跡の発掘調査が昭和57（1982）年9月に終了し、約3か月後の昭和58（1983）年1月から初年度工事の行われる予定地東部に位置する小字辻・一倉両地区を「第1次調査」として発掘調査を開始することとなった。

## 第2節 調査の体制

昭和57（1982）年度の調査は、総社市教育委員会社会教育課文化係の文化財専門職員があたることとした。調査にあたっては岡山県教育委員会の指導を受け実施した。辻遺跡は谷山が、一倉遺跡は高田が主に担当し、調査の状況に応じ村上幸雄が指導・援助した。

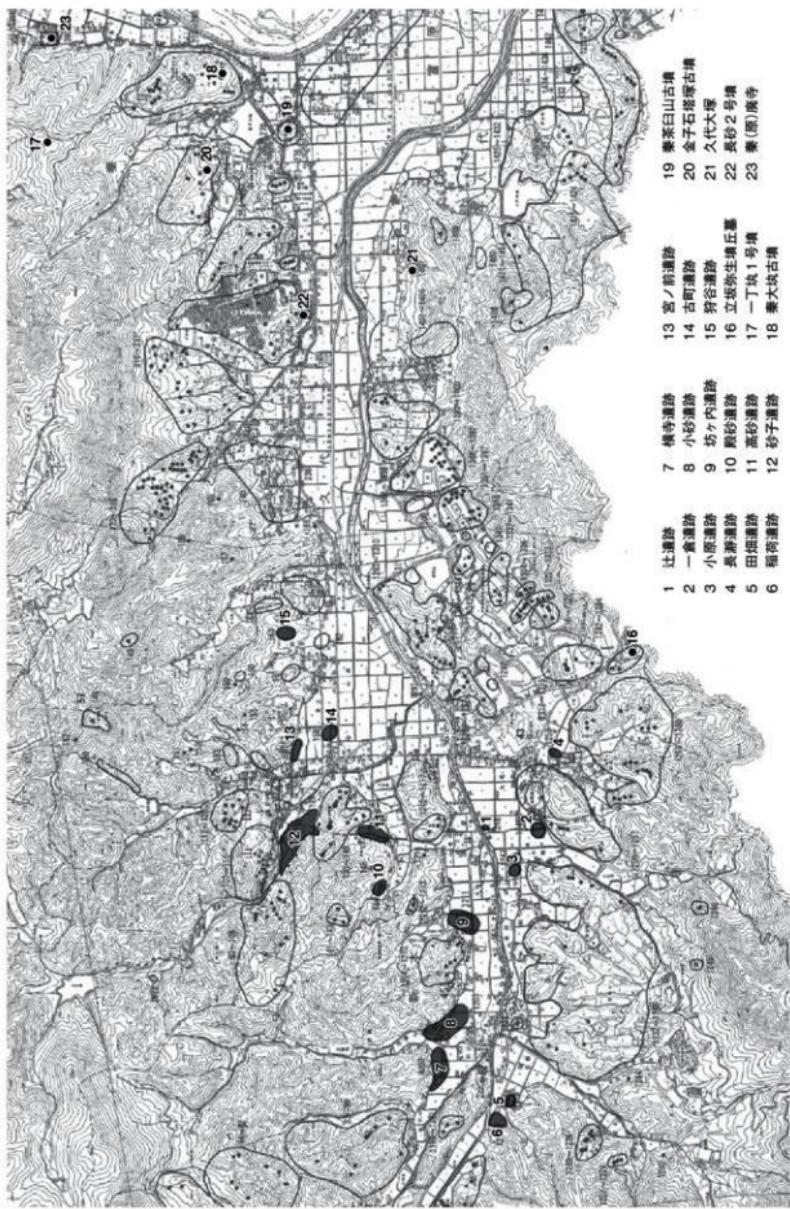
整理作業は調査後に服部収蔵庫において実施し、概要報告をまとめた。しかし、当時は簡易印刷の概要報告であり、配布は限局的であった（付載1として抜粋で再録）。

報告書作成は平成27（2015）年から平成29（2017）年に図面整理作業が進んだことから、令和2（2020）年度に観光プロジェクト課文化財係で実施した。報告書作成にあたっては、調査直後の成果発表資料と調査日誌を参考としている。しかし、実際残っている図面と遺物に齟齬がでてきた。その差異については本文中に記載した。

調査組織	昭和57（1982）年度	報告書体制	令和2（2020）年度
教育長	岡崎 妙雄	総社市長	片岡 聰一
教育次長	畠 隆光～4月30日 名畠 佳五 5月1日～	産業部長心得	西川 茂
社会教育課長	茅野 健二	観光プロジェクト課長	松久 茂喜
課長補佐	小倉 悟	課長補佐兼文化財係長	前谷 学
係長	村上 幸雄（調整・調査）	主査	前角 和夫
主事	秋山 律郎（庶務）		
タ	谷山 雅彦（調査）		
タ	高田 明人（調査）		
服部収蔵庫	村上 敏子（整理）		



第1図 新本は場整備に伴う確認調査位置図（上：第I工区 左下：第II工区）(S=1/10,000)



第2図 平成19(2007)年発行「総社市道路分布図及び手引き」から(S=1/33,000)

第1表 第I工区 確認調査結果

地点名	所在地	トレンチ	遺構・遺物
1	梅花谷2931	1-1	
		1-2	
2	梅花谷2932-3	2-1	
		3-1	
3	梅花谷2935-1	3-2	○
		3-3	○
4	梅花谷2940-1	4-1	
		4-2	
5	池田2875	5-1	
		5-2	○
6	池田2870	5-3	
		6-1	
7	尾崎2536	6-2	
		7-1	
8	小原2471	7-2	
		8-1	
9	一倉2041	8-2	
		8-3	
10	一倉2040-1	8-4	
		8-5	
11	辻967 辻971-1	9-1	
		9-2	
12	辻1003-1	9-3	
		9-4	○
13	辻1004-1	10-1	○
		10-2	
14	辻1000-1	10-3	○
		10-4	
15	辻1020	11-1	
		11-2	
16	鴨田945	11-3	
		11-4	
17	鴨田891	11-5	○?
		11-6	
18	鴨田907	12-1	
		12-2	
19	鴨田916	12-3	
		13-1	○
20	鴨井田1815	13-2	○
		14-1	
21	鴨井田1809	14-2	
		14-3	○
		14-4	
		14-5	
		15-1	
		15-2	
		16-1	
		16-2	
		16-3	
		17-1	
		17-2	
		18-1	
		18-2	
		18-3	
		18-4	
		18-5	
		19-1	
		19-2	
		19-3	
		19-4	
		19-5	
		19-6	
		19-7	
		20-1	
		21-1	
		21-2	

地点名	所在地	トレンチ	遺構・遺物
22	鴨井田1657	22-1	
		22-2	
		22-3	
		23-1	
		23-2	○
23	長瀬211	23-3	
		23-4	○
	長瀬213-2	23-5	○
		24-1	
		24-2	
25	長瀬221	25-1	
		25-2	
		25-3	○
		25-4	
		25-5	○
26	長瀬218	25-6	
		26-1	○
		26-2	
		26-3	
		27-1	
27	長瀬302	27-2	○
		27-3	
28	望363	28-1	

第2表 第II工区 確認調査結果

地点名	所在地	トレンチ	遺構・遺物
29	稲荷4155-1	1	○
		2	○
30	稲荷4154	3	○
		40	○
31	稲荷4153	4	
		5	○
32	田畠3594	6	○
		7	○
33	田畠3596	8	○
		9	○
34	田畠4071	39	○
		10	
35	田畠4070	11	
		12	
36	田畠4068-2	13	
		14	
37	台3635	15	
		16	
38	田畠3624-1	17	
		18	
39	田畠3601	19	
		20	○
40	台3639	21	○
		22	
41	台3642 台3643	23	
		26	○
		27	○
		28	○
		24	○
42	台3619 台3620	25	
		29	
43	屋敷3651-1	30	
		31	○
44	屋敷3643	32	
		33	○
45	屋敷3528	34	○
		35	
		36	○
		37	
		38	



写真1 確認調査 地点13 トレンチ13-1北（西から）



写真2 確認調査 地点13 トレンチ13-2北（北から）

### 第3節 調査の経過

遺跡名は、調査地の小字から辻遺跡と呼称している。

辻遺跡は確認調査時の調査地点13に位置する（第1表）。近接する調査地点12で遺構等は検出されていない。確認調査で新たに発見した遺跡の多くは丘陵に接する台地に上に立地しているのに対して、辻遺跡は新本川沿いの台地先端に位置する。これは、辻遺跡の時期と内容によるものと思われる。

発掘調査は、昭和57（1982）年度に「第1次調査」として実施することとなった。辻・一倉両遺跡のうち、調査面積約1,000m<sup>2</sup>と規模が小さく、新本川に近接する辻遺跡を1月10日（月）から調査を開始した。

1月8日（土）に調査道具を搬入。調査に先立って表土・床土まで重機を用いて調査地東側に除去した。この遺跡地内では確認調査時に4か所の調査区を試掘しており、溝1と中世の土壤墓を検出していた。

表土等の除去後、遺構は土壤墓を中心に調査地東側に集中することが明らかとなり、確認時の溝1周辺では遺構が希薄であることから調査西側を幅1mによる溝状の掘り下げで遺構検出を行い、溝1の方向等を追求した。

基本的には表土・床土を除去すると基盤層になるが、この境目にはマンガン等の凝集があり、この基盤層上の凝集部分も除去しないと遺構が明瞭に検出できない。

1月19日（水）より一倉遺跡の調査と並行して行った。

土壤墓は残存状態が悪いものの、人骨が検出されたことから、1月28日（金）にバラフィンで固め取り上げた。2月8日（火）には井戸を完掘、一倉遺跡の調査も進む。その後、一倉遺跡では現地説明会を2月19日（金）に実施し、調査成果を広く周知した。

また、昭和60（1985）年10月4日付けで「新本地区（第Ⅱ工区）県営は場整備事業に伴う文化財の調査」の依頼を受けたことにより、確認調査を昭和61（1986）年2月～3月にかけて実施した。



写真3 辻遺跡 調査区全景（東から）

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

総社市は岡山県の南西部に位置し、東は岡山市、南は倉敷市と接している。市のほぼ中央を高梁川が蛇行しながら南に流れ、倉敷を通過し、やがて瀬戸内海へと抜ける。高梁川には多くの支流があり、市域西部を東西に流れる新本川もその一つである。

新本川流域は北と南に山塊があり、ここから流れでた雨水が新本川に集まり、高梁川へと注がれている。先の山塊は基本的には花崗岩地帯で、長い年月をかけ風化した真砂土が新本川に向かい堆積し、谷部ではこの層を侵食して小河川が流れるためその両岸に段丘が形成される。南の高山は標高384.7mで、西に庭木川が、東には小原川が流れる。小原川の東にも200m級の山塊があるが、徐々に標高が下がり、谷が大きく入り込むところがある。この部分が峠となり倉敷市真備町に通じている。現在、主要地方道倉敷美袋線が通っている。

山塊から新本川までは比較的平坦な水田が広がっている。このうち東から小字稻井田・丸尾・小原・屋敷にまとまった小平野部がある。



第3図 位置図 (S=1/240,000)

### 第2節 歴史的環境

新本川流域では、縄文時代早期の土器が長瀬遺跡から出土し、上原遺跡では弥生前期の遺構が認められるなど、高梁川以東とほぼ同じような時期より活動が知られている。

弥生時代の集落では昭和57(1982)年に一倉遺跡が最初に調査されてから、新本川両岸で相次いで調査されている。特に新本側左岸の横寺遺跡からは小銅鐸や家形土製品など注目する遺物も出土している。この遺跡は南向きの緩やかな斜面に弥生時代の集落と古墳時代の集落が重複して認められ、この地域の拠点として重要な位置を占めている。横寺遺跡の東方に位置する坊ヶ内遺跡もほぼ同様に南東方向に緩やかに傾斜する台地上に形成された弥生時代の住居跡が集中する集落である。この場所では古墳時代・中世においても引き継いで利用されている。

稲荷遺跡では弥生時代の住居跡も認められるが、古墳時代のカマドを持つ方形の住居跡がまとまって検出されている。周辺で以前から知られていた古墳群や近年調査された一丁塙古墳(岡山県指定史跡 全長約70.0m)・茶臼嶽古墳(全長約55.4m)などを築造した集落の一端が明らかとなった。また、板井砂製鉄遺跡をはじめ7世紀を中心とした製鉄遺跡群が工業団地造成を契機に調査されている。

終末期古墳として知られている長砂2号墳や県内最古級の寺院跡である秦庵寺(岡山県指定史跡)

を生み出す生産力が長い年月をかけ新本川流域に育っていたことを示している。

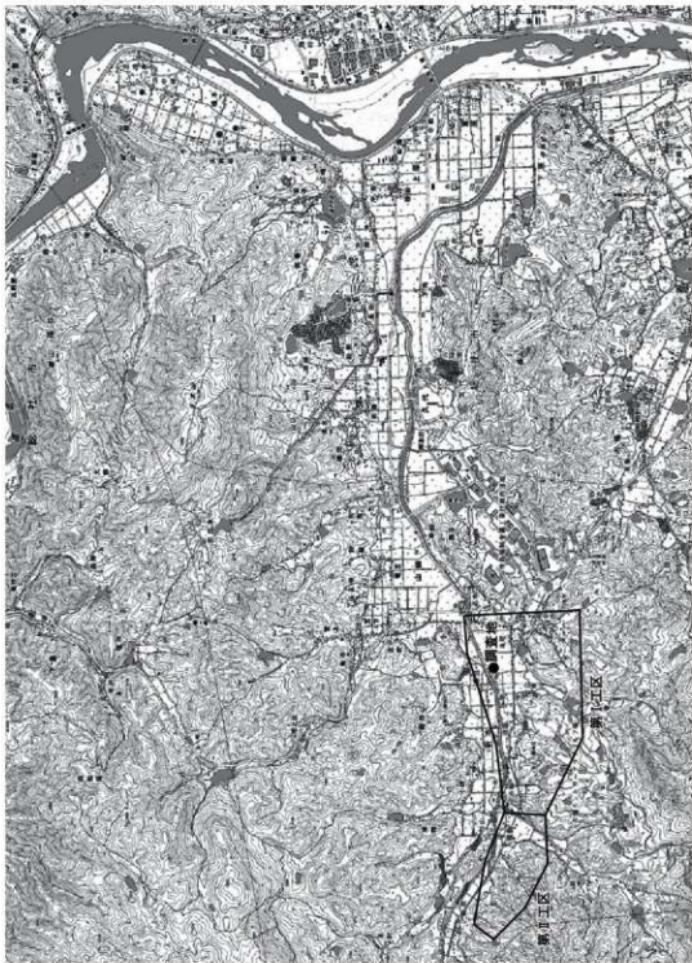
その後、平安時代以降には田上荘・久代荘・橋本荘・上原郷などの荘園が置かれることとなる。戦国時代には山頂に鬼ノ身城・木村山城・伊予部山城・市場古城などが築城されている。

#### 主要参考文献

『総社市史』考古資料編 総社市 1987年

『総社市埋蔵文化財調査年報』1~28 総社市教育委員会 2019年

『水島機械金属工業団地協同組合 西団地内遺跡群』 総社市教育委員会 1991年



第4図 調査地範囲図および位置図 (S=1/50,000)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の概要

昭和56（1981）年の確認調査では調査地（No.13）で中世の土壙墓と溝1を検出したが、遺跡の範囲は南の水田（No.12）まで広がっていないことが分かった。立地としては新本川に近接し、南から北に下がる台地の先端に位置している。また、出土した遺物も中世の土器であり、立地からこれより古い古墳時代以前の遺跡が存在する可能性は低いと考えられた。周辺の畦畔状況からも今回明らかになった屋敷地を想定する特徴も無かった。

調査は土壙墓があった東側を重点に検出作業を進めた。調査区西部は確認調査時の溝と柱列以外に遺構がほとんど無いことから、溝周辺を検出面まで下げて精査した。さらに西側は断面観察で溝1の方向確認にとどめた。これは溝1からの出土遺物もなく、平・断面においても人為的な痕跡を見いだせなかつたためである。

一方、土壙墓周辺では確認調査時の溝2がほぼ真北に曲がり、東西方向と南北方向の溝で区画する屋敷他の一角であることが分かった。また角に当たる位置では井戸が検出され、区画溝がこれを避けるように曲げられていることも分かった。

溝で区画された敷地内では掘立柱建物2棟が溝の方向を意識して配置されていた。

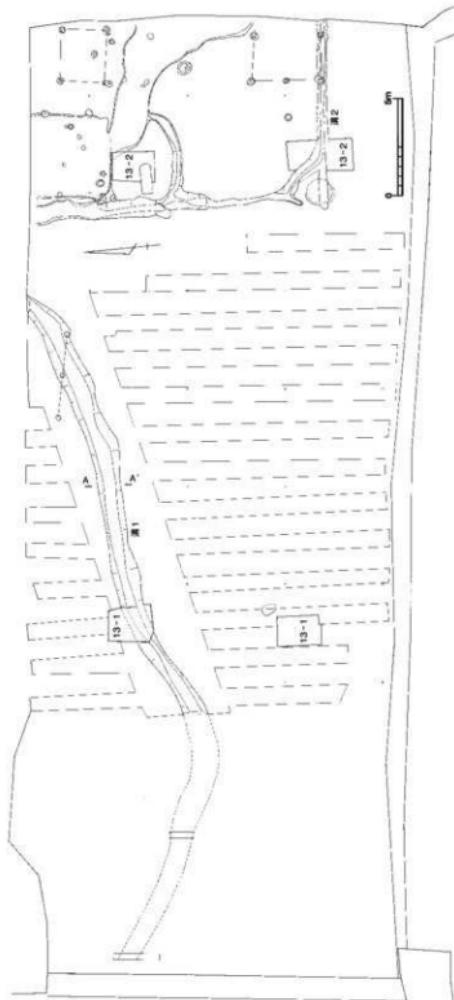
土壙墓は南北溝に近接し、直行する方向に掘られ、南部分には溝を設けて一定の空間を聖域としていた。

このほかに方形や溝状の浅い凹部を検出したが性格は不明である。

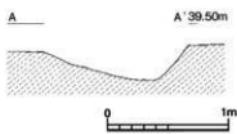
いずれの遺構からも中世の土器が出土しているとから、中世以前における生活の場としては利用されず、屋敷が廃棄された後約700年間、今まで農地となっていた。このため、地表に屋敷地の痕跡が残らなかつたものであろう。



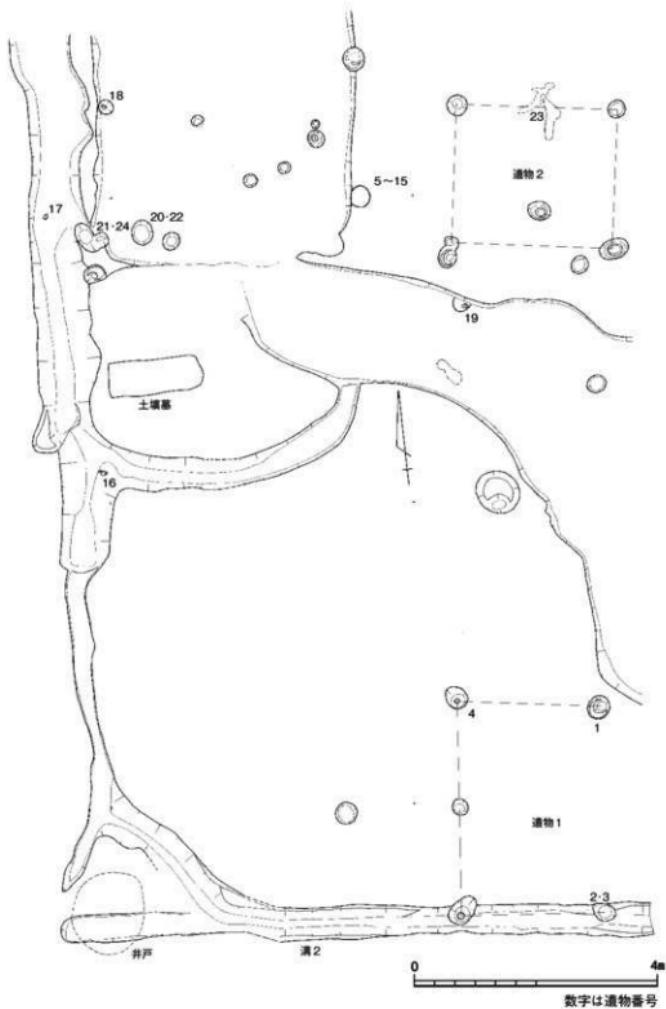
第5図 調査地位置図 (S=1/1,500)



第6図 汎路全体図 (S=1/250)



第7図 溝1 断面図 (S=1/40)



第8図 東部の遺構配置図 (S=1/80)

## 第2節 挖立柱建物・柵列・柱穴ほか

### 掘立柱建物1（第8～10図）

調査区南東隅に位置する掘立柱建物。東側が調査区外に伸びていると考えられるので、全体像は不明であるが、桁行1間以上×梁行2間の東西棟であると思われる。柱間距離は桁行が2.3m、梁行が3.5mを測る。検出時には溝と区別できなかった。

遺物の出土状況から柱穴は溝が埋没した後に掘られたと考えられる。柱穴から土師質土器・椀1～3、亀山焼・鉢4が出土している。土器の特徴から13世紀中頃に廃棄された建物と思われる。



写真4 挖立柱建物1 (東から)



写真5 挖立柱建物1  
遺物出土状況 (東から)

### 掘立柱建物2（第8・11図）

調査区北東隅に位置する掘立柱建物。桁行1間×梁行1間である。柱間距離は桁行が2.2m、梁行が2.6mを測る。東西方向を梁行としたのは柱間中央に炭・焼土などが認められたことによる。

調査後の検討では、周辺の柱穴の組み合わせで建て替えを窺うことができ、掘立柱建物3を想定している。

炭近くで出土した土師質土器・椀23（第14図）の特徴から13世紀後半の建物と思われる。

### 柱列（第6・12～14図）

調査区東北部、溝1の上面で検出した柱列である。規模は、2間、柱間2.1mを測る。

出土遺物は無いが、掘立柱建物等と同時期と思われる。



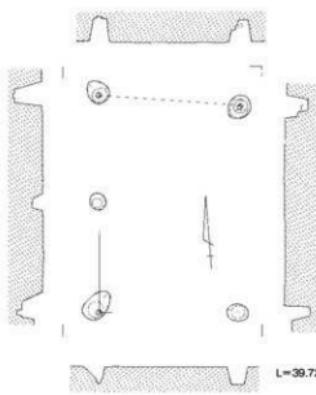
写真6 挖立柱建物2 (東から)



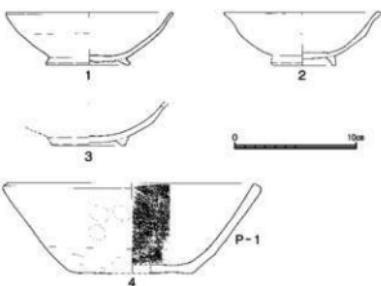
写真7 柱列 (東から)

### 柱穴・浅い窪地（第8・13・14図）

掘立柱建物2の周辺には浅い窪地と柱穴が複数あるが、機能は分からぬ。土器5から15までが掘立柱建物2の西に位置する柱穴よりまとめて出土した。出土時には13枚と確認していたが、整理後には11枚であった。土師質土器・椀16・17は南北方向の溝から、18・19・20・21・22・24は柱穴から出土している。



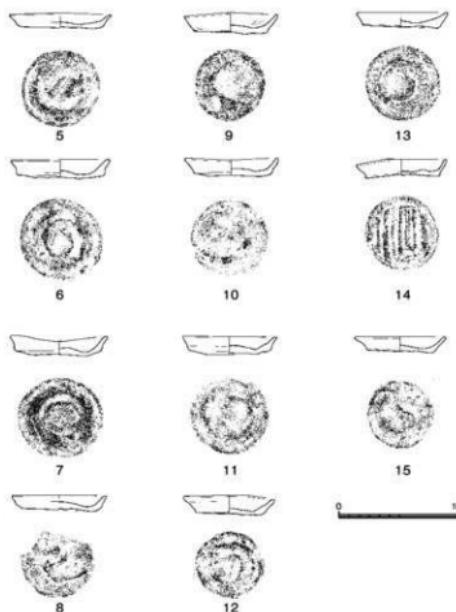
第9図 据立柱建物1 平・断面図 (S=1/80)



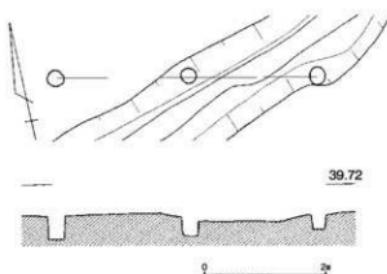
第10図 堀立柱建物1 出土遺物 (S=1/4)



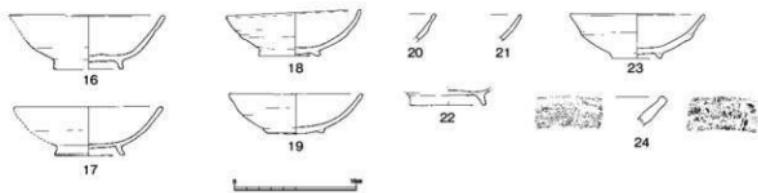
第11図 据立柱建物2 平・断面図 (S=1/80)



第13図 柱穴 出土遺物 (S=1/4)



第12図 柱列 平・断面図 (S=1/80)



第14図 柱穴・溝 出土遺物 (S=1/4)

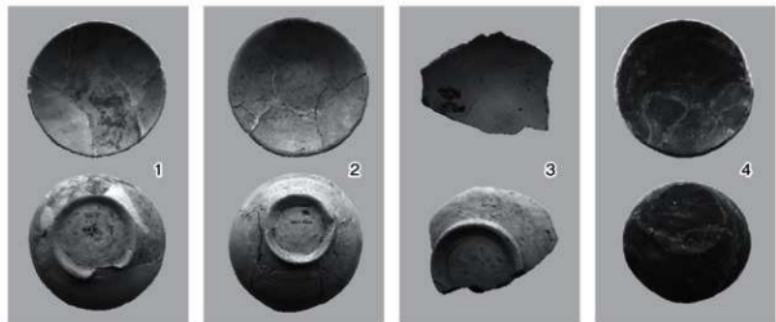


写真8 据立柱建物1 出土遺物

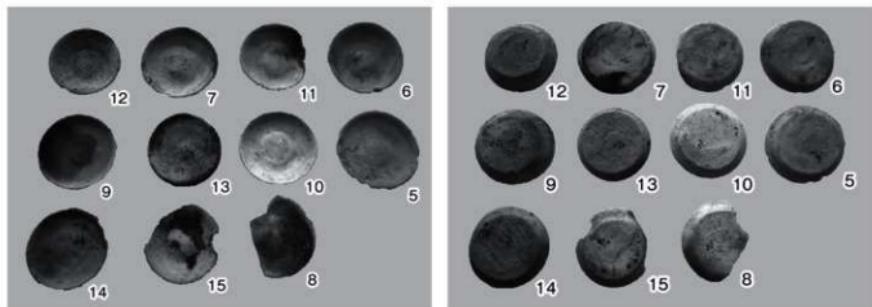


写真9 柱穴 出土遺物

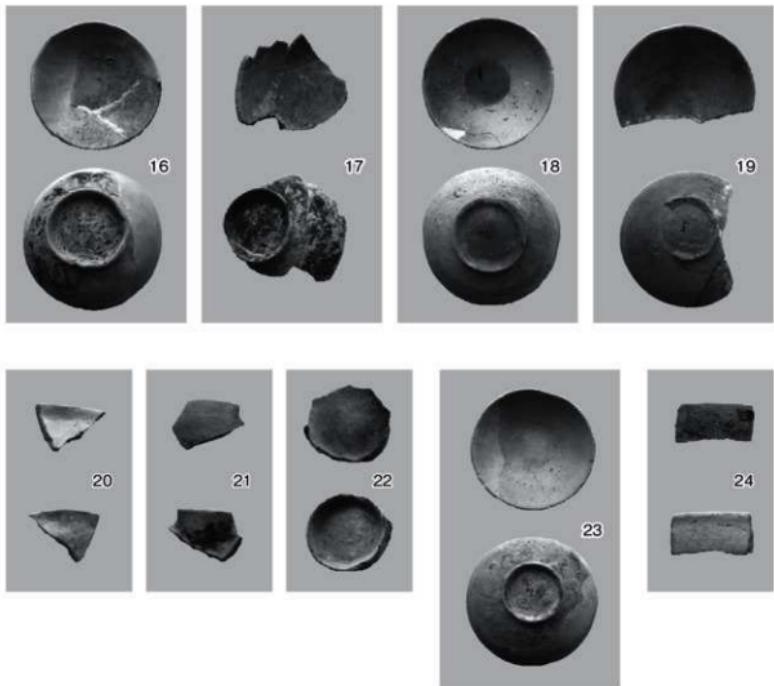


写真 10 柱穴・溝 出土遺物

### 第3節 土塚墓

#### 土塚墓（第8・15図）

調査の契機となった遺構で、小刀以外の出土遺物は確認調査時で出土したものである。

平面形は長方形を呈しており、短辺0.58m、長辺1.56mを測る。深さは0.35m、床面で人骨が腕・足を屈曲させた横臥位の状態で出土した。

小刀（槍先？）は茎・刃先の一部が欠損している。残存全長30cm、刃長24.6cmを測る。部分的に木質が残ることから、鞘に納めた状態で刀を東側に向かって、頭部近くに置かれていたと考えられる。

出土した土器も確認調査時の位置から頭部近くに置かれていたものと考えられる。

人骨はかろうじて位置と形状をとどめていたが、脆弱で劣化が進んでいたため、パラフィンを表面に塗布し、取り上げをおこなった。

土師質土器・椀25の特徴から土塚墓の時期は13世紀前半と考えられる。



写真11 土塚墓（東から） 左：確認調査時 右：発掘調査時

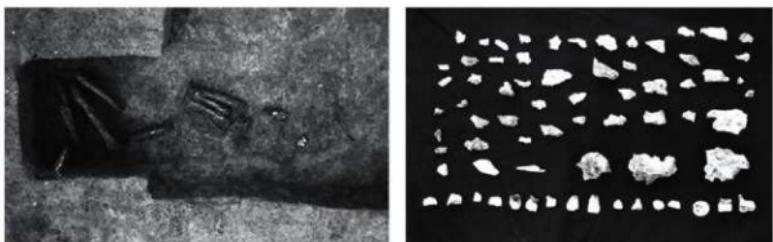
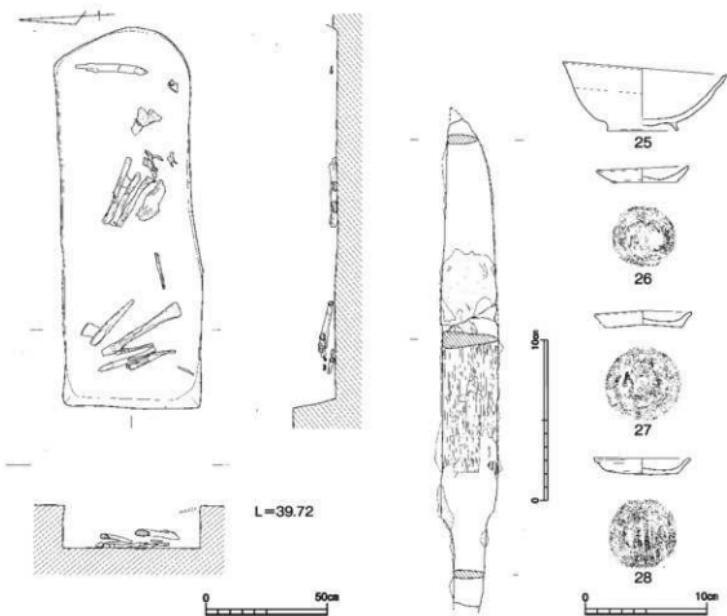


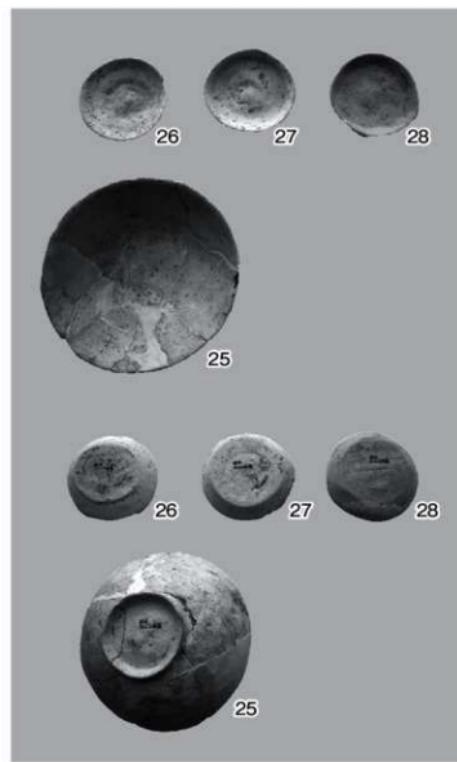
写真12 土塚墓 左：人骨出土状況（南から） 右：出土人骨



写真13 土塙墓と区画溝（西から）



第15図 土塙墓 平・断面図 (S=1/20) と出土遺物 (S=1/3・4)



## 第4節 井戸

### 井戸（第8・16図）

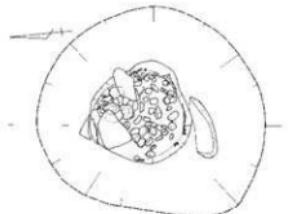
井戸は、直径1.4mの円形の掘方で、直径約60cmの木製の井筒を据えたものである。井筒は底部分がかろうじて残存していたが。取り上げられる状態には無かった。一本の繰り抜きと考えられる。

現存の深さは92cmを測る。井戸底には小砾が敷かれていた。

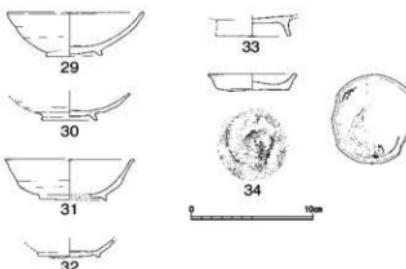
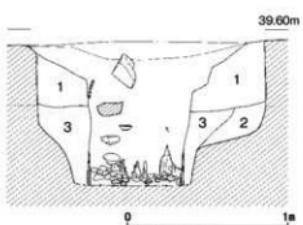
土師質土器・小皿34の内側には墨跡が残っている。文字・記号ではなく、小皿の淵を利用して筆を整えた跡ではないかと考えられる。土師質土器・椀29・32の特徴から井戸は13世紀後半に廃棄されたと思われる。



写真15 井戸（北西から）



- 1 黄色粘質土（青灰色粘質土をブロックで含む）
- 2 黄色粘質土
- 3 青灰色粘質土



第16図 井戸 平・断面図 ( $S=1/30$ ) と出土遺物 ( $S=1/4$ )

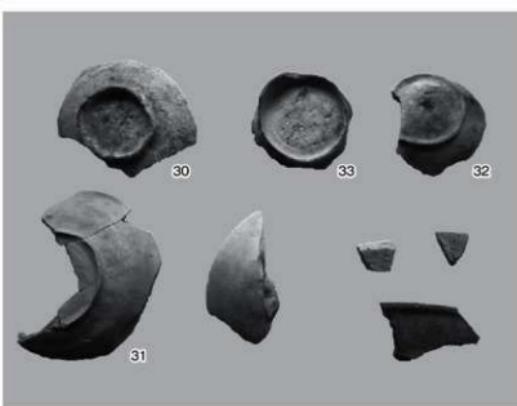
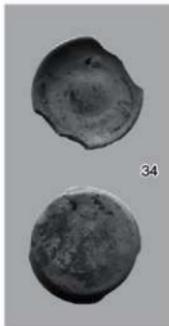
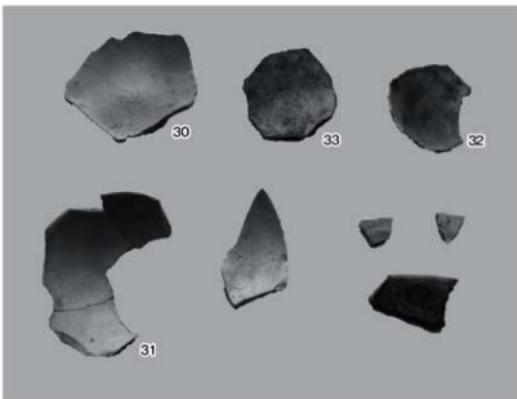
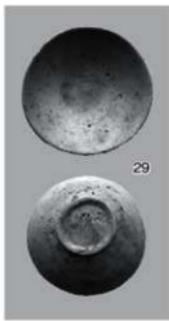


写真 16 井戸 出土遺物

## 第5節 溝

### 溝1（第6・7図）

調査区の西北部分で検出した溝で、やや南に弧を描く。

溝の最大幅約1.5m、深さ約30cmを測るが、いずれも規格性はない。遺物も含まないことから中世以前に形成された自然流路と思われる。このため、西部分は断面で方向のみ確認した。

### 溝2（第8・17～19図）

調査区南東部分で確認した東西方向の溝で、幅約55cm、深さ約20cmを測る。

溝底から出土した土師器・椀35の特徴から13世紀中ごろには機能していたと考えられる。

この溝は南西角にある井戸を迂回して南北方向の溝と繋がる。この南北溝の出土した土師質土器・椀16・17（第21図）の特徴から東西溝と同時期である。



写真17 溝1（西から）

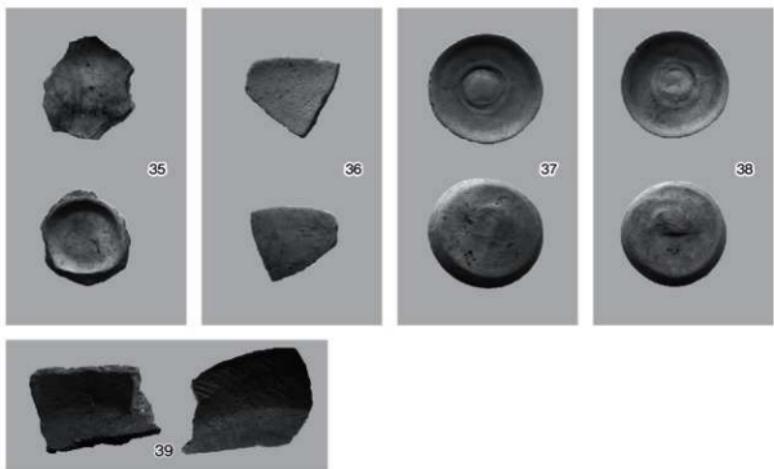
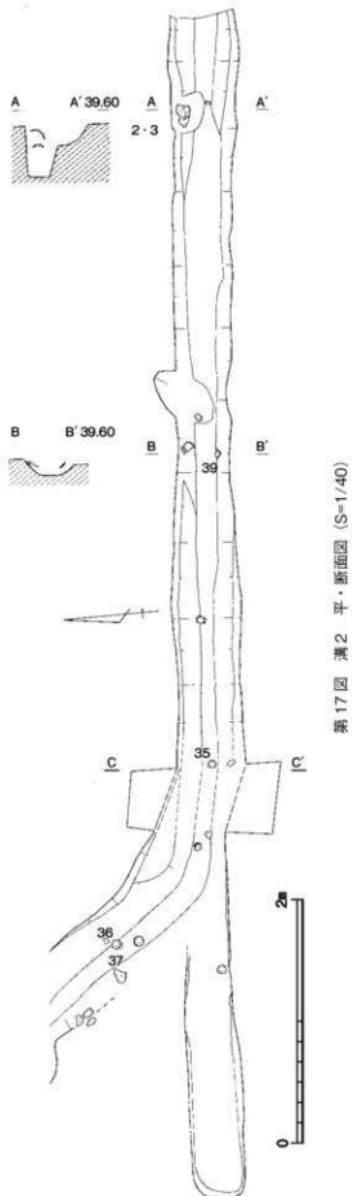
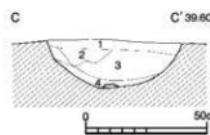


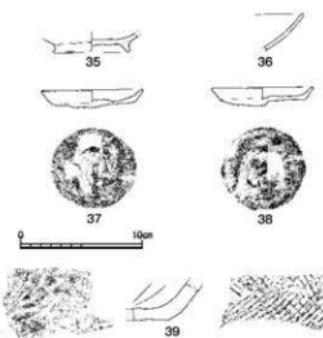
写真18 溝2 出土遺物



第17図 平・溝2 断面図 (S=1/40)



第18図 溝2 断面図 (S=1/20)



第19図 溝2 出土遺物 (S=1/4)

## 第4章　まとめ

### 屋敷地について

辻遺跡は、西・南を溝で区画する農村地内の屋敷跡と考えられる。屋敷とするのは耕作地を溝により区別し、外側から見て居住地として独立させていることによる。調査区はは場整備事業により掘削が予定される範囲に限定されるため、調査区外に広がっている遺構については明らかにできていない。

遺跡は区画溝・掘立柱建物・土壙墓・井戸から構成されている。土壙墓（屋敷墓）は全国で調査され、総社市内においても明らかになっている。屋敷墓は10世紀後半には先行形態が出現し、13世紀後半には終焉し、集団墓地が一般化するとされている。屋敷墓の被葬者は、家の建物を最初に建設した先祖およびその家族（家長）の墓と考えられている。

一倉遺跡においても木棺墓が検出されている。ここでは木棺に2体埋葬されていた。いずれも横臥位で腕・足を折曲している状態は同じである。この土壙墓が屋敷のどの位置にあたるかは判然としない。しかし埋葬時の方位については意識をしている。辻遺跡では頭部が東位であるが体は北位を向いている。一倉遺跡では頭部を北位に置いている。屋敷墓においては、頭部が北を意識し、腕を胸の位置に曲げる姿勢が多くの遺跡で共通しているようである。

建物・井戸とともに規模は一倉遺跡周辺が勝っていることから、農村の中心は南の一倉遺跡周辺と考えられる。しかし、辻遺跡の土壙墓にはまとまった副葬品があり、ある程度の役目をもった人物であった可能性がある。小字の辻が示すように、この地は新本川に架かる小原橋を渡り、国司神社へ向かう「辻」に位置し、橋などの出入口を監視もしくは警戒するような場所であったのかもしれない。土壙墓から出土した小刀はそうした役目を表していると思われる。

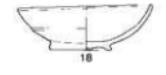
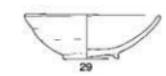
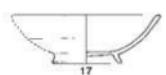
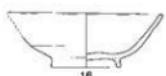
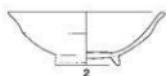
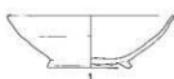
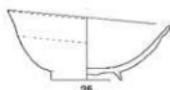
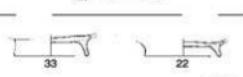
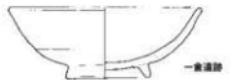
### 土師質椀について

辻遺跡は出土遺物から13世紀前半から後半までのおおむね100年以内の存続期間が考えられる。出土した土師質椀はかつて「早島式土器」と呼ばれ、近年編年作業が進み時代が下ると法量の縮小化が進むことが明らかになっている。第20図は主に辻遺跡出土の土師質椀を法量順に並べたもので、一番上だけは一倉遺跡C地区の確認調査時に出土したものである。第21図は辻遺跡と岡山市鹿田遺跡の土師質椀の法量を比較したもので、辻遺跡の活動時期が13世紀にあることがわかる。市内では清水角遺跡が13世紀後半の遺跡で土師質椀の平均口径11.25cm・器高3.57cmである。

本庄地区では11世紀後半から村落が形成され、13世紀には京都の岩清水八幡宮の荘園が置かれていた。今回の調査ではこうした農村形成の一端が明らかになった。

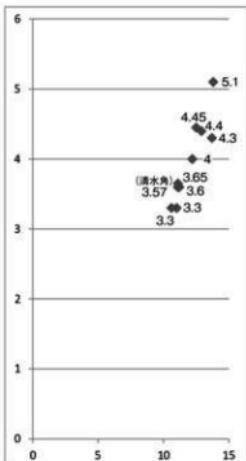
### 参考文献

- 藤田至「中世の屋敷墓」「史林」71巻3号 1988年  
井上弘「百間川米田遺跡」3「岡山昭和藏文化財発掘調査報告」74 1989年  
草原孝典「三手向原道路」岡山市教育委員会 2001年  
橋田正徳「中世の社会の形成」2014年  
山本悦世「鹿田遺跡」1「岡山大学構内道路発掘調査報告」第4集 岡山大学昭和藏文化財センター 1990年  
山本悦世「鹿田遺跡」4「岡山大学構内道路発掘調査報告」第11冊 岡山大学昭和藏文化財研究センター 1997年  
『鹿田遺跡』12「岡山大学構内道路発掘調査報告」第34冊 岡山大学昭和藏文化財研究センター 2018年

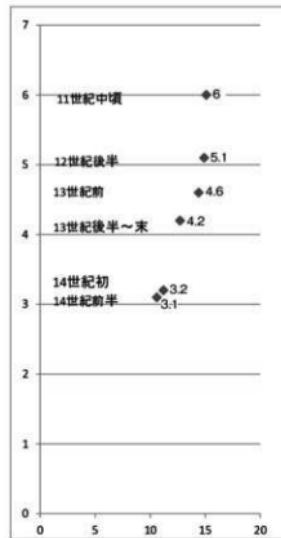


0 10mm

第 20 図 土師質椀法量変遷図 ( $S=1/4$ )



第 21 図 辻遺跡 土師質椀法量



第 22 図 鹿田遺跡 土師質土器椀法量 平均値

第3表 遺物観察表1

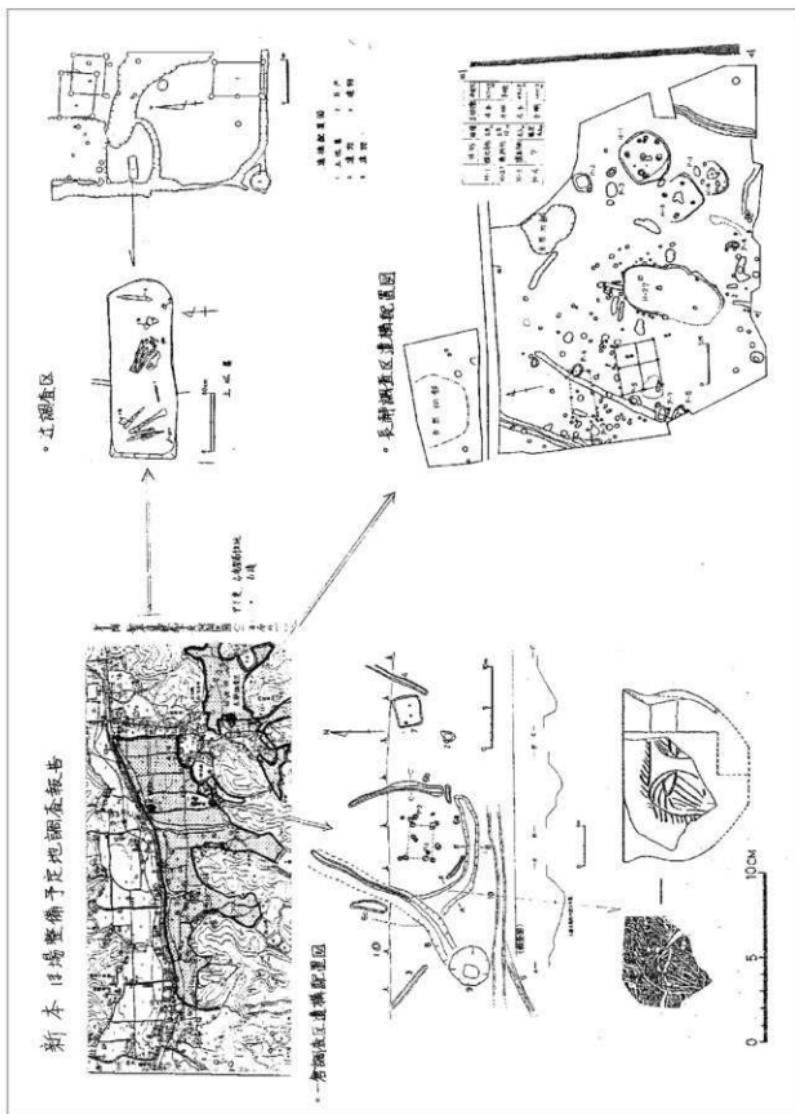
番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調
		cm	cm	cm			
1	土師質 梶	13.7	6.9	4.3	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
2	土師質 梶	12.9	5.4	4.4	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
3	土師質 梶	—	6.6	—	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	暗白色
4	亀山焼 鉢	21.2	10	7.4	内面ヨコナデ/ハケ 外面押圧、ケズリ	砂/少	黒色
5	土師質 小皿	8.4	6.4	1.2	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	暗白色
6	土師質 小皿	8.2	7.1	1.4	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	暗白色
7	土師質 小皿	8.1	7	1.6	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	暗白色
8	土師質 小皿	7.8	6.1	1.3	底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	淡白色
9	土師質 小皿	7.8	6	1.6	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	暗白色
10	土師質 小皿	7.7	6.2	1.5	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	白色
11	土師質 小皿	7.7	6.6	1.5	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	白色
12	土師質 小皿	7.6	5.6	1.5	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	暗白色
13	土師質 小皿	7.5	6.2	1.2	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/少	白色
14	土師質 小皿	7.7~7.5	6.2	0.9	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後板目/ナデ	砂/微	暗白色
15	土師質 小皿	7.5	5.6	1.3	内・外面ナデ 底部ヘラ切り後ナデ	砂/微	白色
16	土師質 梶	12.5	5.25	4.45	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
17	土師質 梶	12.2	5.6	4	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
18	土師質 梶	11.1	5.1	3.6	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/少	白色
19	土師質 梶	11	5.1	3.3	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	褐色
20	土師質 梶	—	—	—	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	暗白色
21	土師質 梶	—	—	—	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	淡赤白色
22	土師質 梶	—	6.2	—	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	暗白色
23	土師質 梶	11.1	5.4	3.65	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/少	白色
24	土師器 瓢	—	—	—	内外ナケ	砂/少	灰白色
25	土師質 梶	13.8	5.5~5.8	5.1	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
26	土師質 小皿	7.5	5.4	1.35	内外ナデ	砂/微	白色
27	土師質 小皿	8	6.3	1.2	内外ナデ	砂/微	白色
28	土師質 小皿	7.9	5.9	1.3	内外ナデ 底部板目	砂/微	白色
29	土師質 梶	11.2	4.6	3.6	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
30	土師質 梶	—	4.6	—	内外ナデ	砂/微	白色
31	土師質 梶	10.6	5.3	3.3	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、押圧	砂/微	白色
32	土師質 梶	—	5.1	—	内外ナデ	砂/微	暗白色
33	土師質 梶	—	6.1	—	内外ナデ	砂/微	白色
34	土師質 小皿	7.3	6	1.4	内外ナデ	砂/微	白色

番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調
		cm	cm	cm			
35	土師質 梶	—	6.3	—	内外ナデ	砂/微	暗白色
36	土師質 梶	—	—	—	内外ナデ	砂/微	淡黃白色
37	土師質 小皿	8.4	6.8	1.5	内外ナデ	砂/微	暗白色
38	土師質 小皿	8.3	6.9	1.5	内外ナデ	砂/微	暗白色
39	亀山焼 壺	—	—	—	内面ナデ 外面格子タタキ	砂/多	青灰

第4表 遺物観察表2

番号	器種	全長	最大幅	最大厚	残存長	材質	備考
		cm	cm	cm	cm		
F1	小刀	0	3.5	1	30	鉄	木質付着

## 付載1 新本ほ場整備予定地調査報告（抜粋再録）



## 地区

他の遺物と共に鎌倉・鎌倉の近くに割算されたいたと考えられる。

辺地区は新本川右岸にあり、県道上高木船橋線から国司神社に至る道路の東側で現河道から2段目の水田である。

本地区は、確認調査の時、中世土塁墓及び古い排水溝（第1）が発見されたので緊密調査を行った。

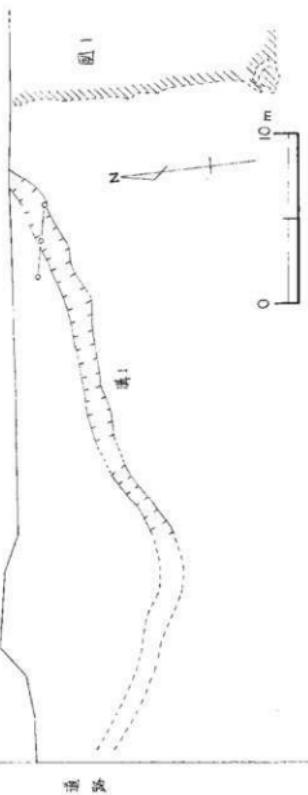
調査の結果、検出された遺構は先の土塁墓1基、井戸1・建物3棟・埴輪遺跡・土松・柱穴（圓）などである。土塁墓から出土した遺物（図2）のほとんどが、現深瀬塗時の出土であり、このうち出土位置のわきで埴輪は引かれており、出土時の状況から、

以下、生力遺構の概要を略述する。

土塁墓は、平割アーチが瓦形で長さ15.6cm、幅35cmを測る。時期は出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

井戸は、縦約145cmの円筒形の掘方に横約60cmの井戸口幅を擴んだもので、現底の深さは92cmを測る。井戸内の土師質高台付碗が若干に残る！ 井戸口には小破が散在していた。時期は、出土した碗から鎌倉時代の乍ら土塁墓より後出しで、船井清水・角澤御のP-1（井戸狀遺構一號400~450cm深さ約80cmの横円形）から出土した碗と併せて同時期と考えられる。

以上のようすは、辺地区では鎌倉時代の遺構が多く検出された。同時に遺構は、真理遺跡でも検出され、これらの比数づける上で重要な資料といふのである。また、鎌倉時代時に他の地点においても鎌倉時代の遺構が検出されているので、今後の調査でさらには鎌倉時代の資料が増加し、不明な点の多い中世研究に大きな役立つと考えられる。



辺地区全體圖 (縮尺 1/200)

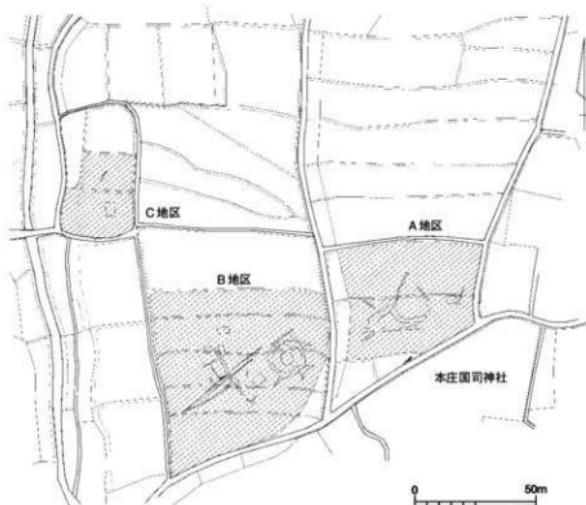
(若山)

## 付載2 新本本庄地区 県営ほ場整備事業発掘調査遺跡の概要

新本本庄地区の県営ほ場整備事業では、本報告以外に以下の遺跡調査を実施した。一部の遺跡については『総社市史』考古資料編において概要報告を掲載しているが、この時点では掲載できていない遺跡もあったため、今回まとめてそれぞれの概要を報告することとした。

### 1 一倉遺跡

一倉遺跡は、辻遺跡の南約300mに位置する。調査区は調査順に従い東からA・B・C地区と呼称し、全調査面積は約5,000m<sup>2</sup>である。南には丸尾古墳群があり、地元では「七座」と呼んでいる。南から延びる丘陵先端には国司神社がある。



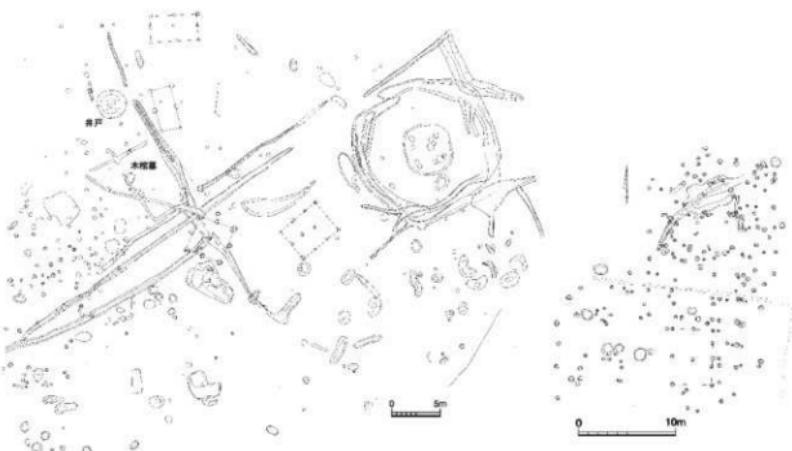
第23図 一倉遺跡 調査範囲図 (S=1/2,000)

A地区は、約2,500m<sup>2</sup>で北に向かって削平が進んでおり、遺構の残存状態は悪くなる。また暗渠排水施設が多く設置されていた。

検出した遺構は弥生時代のもので、弥生時代中期後半から生活の場として利用され、土坑・柱穴・溝が検出されている。後期になると、馬蹄形を呈する径約13mの溝がある。内部の空間には10余りの柱穴が検出された。溝内からは土器が多数出土し、この中に人面を線刻した土器がある。



第24図 A地区 遺構配置図 (S=1/500)



第25図 B地区 遺構配置図 (S=1/500)

第26図 C地区  
遺構配置図 (S=1/500)

B地区では竪穴住居を囲む径約13mの円弧状の溝が検出された。A地区の溝と同じく後期後葉の時期である。

また、調査地西寄りで中世の遺構が多く検出された。井戸は径約3mの掘方に、上面が一辺約1mの正方形に木製の井戸枠を組む、底には曲物を据え割石が敷かれていた。木棺墓は内部に木棺が置かれ、2体の人の骨が残されていた。

C地区においても中世の遺構が検出された。



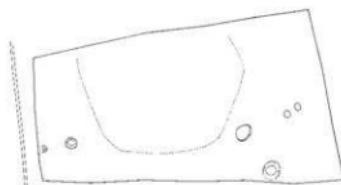
写真 19 A地区 全景（東から）



写真 20 B地区 全景（南東から）



写真 21 B地区 穂穴住居（北から）

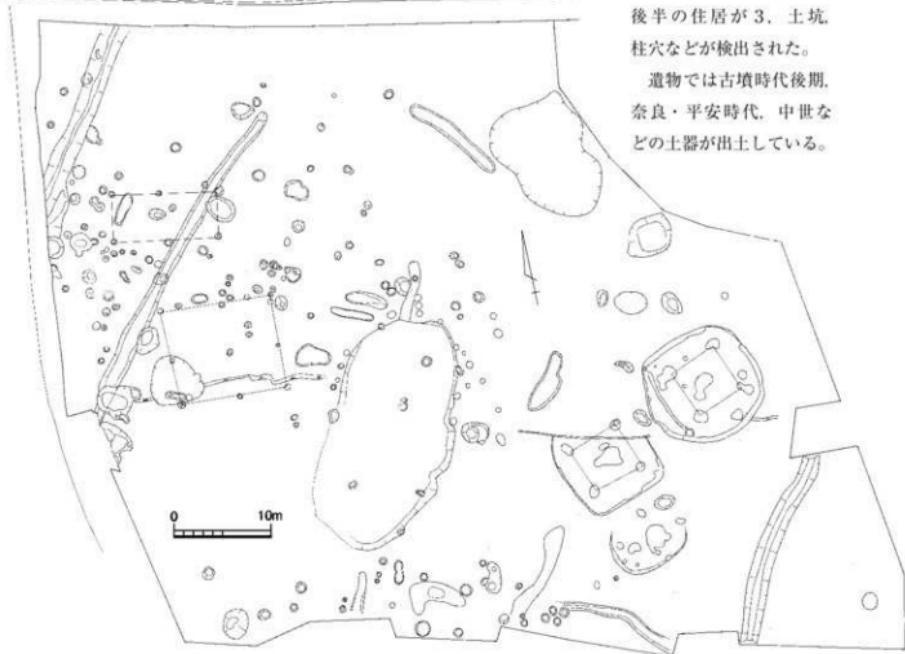


2 長灘遺跡

長瀬遺跡は、倉敷市真備町へ通じる県道倉敷美袋線の西方約300m、北西に延びる小尾根北側に形成された埋積谷の高所に位置する。包含層から縄文時代早期の土器片が出土している。高梁川以西では最も古い。

遺構は、弥生時代中期後半の住居が3、土坑、柱穴などが検出された。

遺物では古墳時代後期、奈良・平安時代、中世などの土器が出土している。



第27図 長瀬遺跡 造構配置図 (S=1/500)



写真22 長瀬遺跡 掘立柱建物群（北から）

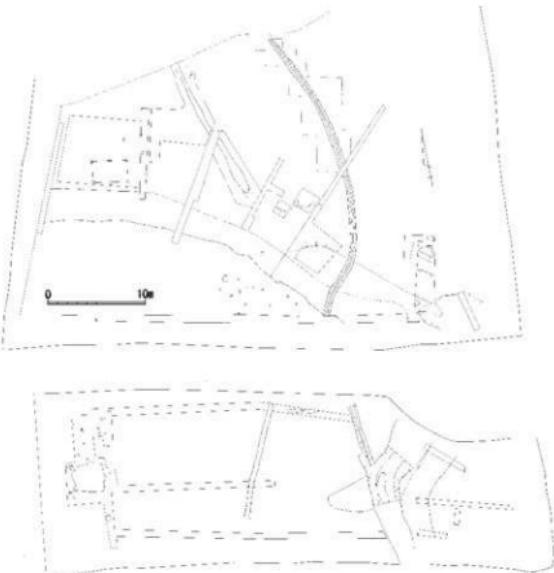


写真23 長瀬遺跡 穂穴住居群（北から）

### 3 小原遺跡

小原遺跡は、一倉遺跡から北西約220mに位置する。南北に流れる小原川の左岸で南から派生する丘陵の先端に広がる台地上にある。確認調査は行っていないが、立地条件が一倉遺跡に近似することから調査対象とした。調査区は東西方向にのびる道で北区と南区に分かれる。

遺構は安定した基盤が認められる南西部分にある。北東部分では溝が2条検出された。東部分はある時期に自然作用で大きく削られた谷溝が走る不安定な場所になったようである。このため中世段階でも遺構は西側に集中している。北区では掘立柱建物1、柱列1がある。南区では浅い大型の土坑が認められ、拳大の石と土器が出土している。中世の集落の一部と考えられるが、遺構は集中していない。



第28図 小原遺跡 遺構配置図 (S=1/500)



写真24 小原遺跡 北区 全景（南東から）



写真25 小原遺跡 南区 土坑（北から）

#### 4 田畠遺跡

田畠遺跡は、昭和61（1986）年の確認調査で明らかになった遺跡で南から延びる低丘陵の先端にある台地上にある。発掘調査は昭和62（1987）年11月から実施した。調査区は南西部から北東に向かい徐々に傾斜し下がる。調査は最も高い部分を1区とし、田んぼの畦畔を境として、6区まで設定した。調査面積は約2000m<sup>2</sup>である。

主な時期は弥生時代後期から古墳時代の住居が多く検出され、弥生時代では住居が7以上、古墳時代で住居が6検出された。

遺構全体では住居以外にも掘立柱建物、柱穴、土坑、土壤墓、井戸、溝などがある。



第29図 田畠遺跡 遺構配置図 (S=1/500)

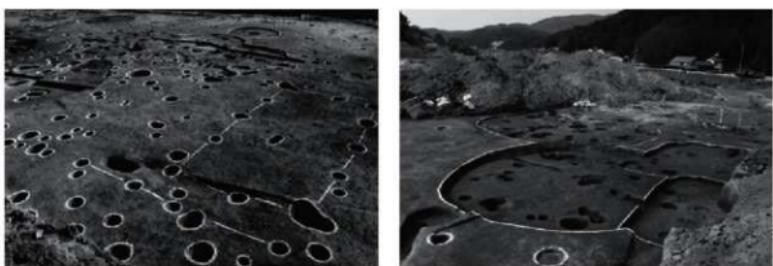


写真 26 田畠遺跡 左：掘立柱建物（北から） 右：豊穴住居群（南から）

## 5 稲荷遺跡

稻荷遺跡は、田畠遺跡とあわせて調査を行っており、間に谷を挟んだ位置にあるが、ともに低丘陵の先端という安定した位置に集落を形成している。

弥生時代の円形住居にはじまり、古墳時代の方形住居が数多く築かれており、とくにカマドをもつた住居が目立っている。しかも、住居はところ狭しというような状況で検出されており、田畠遺跡と比較しても住居の重複率は著しく、居住域としての意識が非常に高かった結果と考えている。



第30図 稲荷遺跡 遺構配置図 (S=1/500)



写真 27 稲荷遺跡 竪穴住居群（東から）



写真 28 稲荷遺跡 竪穴住居群（東から）

第5表 遺物台帳

遺物番号	遺構名(ラベル)	日付	マーキング	保管番号	報告・遺物番号
R001	新本溝2土器12 №3	83.01.22		辻K1	38
R002	新本13溝2土器14			辻K1	36・37
R003	新本辻井戸	83.01.19		辻K1	34
R004	新本辻13(建物2)新pit	83.02.18	J~11	辻K1	5~15
R005			新本辻A-11	辻K1	19
R006			新本辻A-3	辻K1	18
R007			新本辻A-16	辻K1	16
R008			新本辻A-14	辻K1	1
R009			新本辻D2土4	辻K1	2
R010			新本辻13井戸	辻K1	29
R011			新本辻B-1	辻K1	23
R012				辻K1	4
R013			新本辻13-2土壤墓	辻K1	25~28
R014				辻K1	
R015				辻K1	
R016	新本13溝2土器5			辻K1	3
R017	新本辻No13井戸粘質土	83.02.03		辻K1	30~33
R018	新本辻No13P-2	83.01.28		辻K1	21・24
R019	新本辻No13P-3	83.01.28		辻K1	20・22
R020	新本13溝2土器9			辻K1	35
R021	新本辻No13A-1	83.02.01		辻K1	17
R022	新本長瀬25-II遺構№19	83.06.09		辻K1	
R023	新本ほ場整備	83.04.25		辻K1	
R024			新本長瀬25-II■	辻K2	
R025			新本小94	辻K2	
R026			下三輪236-2	辻K2	
R027	新本ほ13-2溝	81.09.08		辻K2	
R028	新本ほ13-2溝			辻K2	
R029	新本ほ13-2	81.09.08		辻K2	
R030	新本県道東鉄滓			辻K2	
R031	新本遺跡№10表採	83.01.06		辻K2	
R032	新本ほ場整備表土剥ぎ	82.12.28		辻K2	
R032	新本ほ場整備表土剥ぎ	82.12.28		辻K2	
R033	辻		辻	特別収蔵庫	小刀
R034	新本ホ9-3	81.09.04		辻K3	
R035	新本ホ6-2	81.09.03		辻K3	
R036	新本ホ5-1E	81.09.03		辻K3	
R037	新本ホ27-2(流込土)	81.09.24		辻K3	
R038	新本ホ8-1灰褐色粘質土	81.09.04		辻K3	
R039	新本ホ3-2トレンチ	81.09.02		辻K3	
R040	欠番				
R041	新本ホ9-2	81.09.04		辻K3	
R042	新本ホ10-3			辻K3	
R043	新本ホ不明			辻K3	
R044	新本ホ10-4			辻K3	
R045	新本ホ11-6'青灰色粘質土	81.09.08		辻K3	
R046	新本ホ19-5			辻K3	
R047	欠番				
R048	欠番				
R049	新本ホ13-2土壤墓(骨)	81.09.07		辻K3	
R050	新本ホ5-3w5層目	81.09.03		辻K3	
R051	新本ホ1-2トレンチ	81.09.02		辻K3	
R052	新本ホ13-2土壤墓	81.09.03		辻K3	
R053	新本ホ11-7	81.09.08		辻K3	
R054	新本ホ6-1	81.09.07		辻K3	
R055	新本ホ1-1トレンチ	81.09.02		辻K3	
R056	新本ホ2-1トレンチ	81.09.02		辻K3	
R057	新本ホ5-2w	81.09.03		辻K3	
R058	新本ホ23-4表採			辻K3	
R059	新本ホ19-6	81.09.14		辻K3	
R060	新本ホ10-1			辻K3	
R061	新本ホ23-3	81.09.17		辻K3	
R062	新本ホ23-4	81.09.18		辻K3	
R063	新本ホ19-3	81.09.14		辻K3	
R064	新本ホ5-3w3層目	81.09.03		辻K3	
R065	新本ホ23の西ブドウハウス出土			辻K3	

## 報告書抄録

ふりがな	つじいせき					
書名	辻遺跡					
副書名	県営ほ場整備事業（新本地区）に伴う発掘調査1					
卷次						
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告30					
シリーズ番号						
編著者名	前角和夫 谷山雅彦					
編集機関	岡山県総社市					
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL 0866-92-8363					
発行年月日	西暦2021年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積
市町村	遺跡番号					発掘原因
辻遺跡	総社市新本	33-208	1248	34° 39' 52.65'	133° 39' 27.75'	1,000
一倉遺跡	総社市新本	33-208	1249	34° 39' 40.53'	133° 39' 25.44'	5,000
長瀬遺跡	総社市新本	33-208	1258	34° 39' 37.48'	133° 39' 48.04'	1,200
小原遺跡	総社市新本	33-208	1247	34° 39' 40.53'	133° 39' 19.25'	1,500
田畠遺跡	総社市新本	33-208	1219	34° 39' 48.74'	133° 38' 14.62'	2,000
稲荷遺跡	総社市新本	33-208	1218	34° 39' 50.13'	133° 38' 9.84'	2,000
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
辻遺跡	集落	中世	溝・井戸・土壙墓	土師質椀・皿・鉄器		
	祭祀	弥生時代	溝・堅穴住居	弥生土器		
一倉遺跡	集落	弥生時代	堅穴住居	弥生土器	溝に囲まれた堅穴住居 人面線刻土器	
		中世	掘立柱建物・溝	土師器椀・皿・曲物		
小原遺跡	集落	中世	掘立柱建物・溝	土師器椀		
田畠遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	堅穴住居	弥生土器 須恵器		
稲荷遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	堅穴住居	弥生土器 須恵器		
要約	<p>辻遺跡では、幅の狭い溝で区画された中に土壙墓・井戸・建物が整然と配置されていた。</p> <p>一倉遺跡では、弥生時代後期の住居を巡る溝から人面を線刻した小型の鉢型土器が出土。</p> <p>長瀬遺跡は、弥生時代中期後半の集落で住居内からサヌカイトの石屑が多数出土した。</p> <p>小原遺跡では、中世の柱穴が多数検出された。</p> <p>田畠遺跡では、弥生時代・古墳時代の住居が多数検出された。</p> <p>稲荷遺跡では、弥生時代・古墳時代の住居が多数検出された。</p>					

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 30

辻 遺 跡

県営ほ場整備事業（新本地区）に伴う発掘調査 1

令和3（2021）年3月31日 印刷

令和3（2021）年3月31日 発行

編集発行　岡山県総社市  
岡山県総社市中央一丁目1番1号

印 刷　柳本印刷株式会社  
岡山県総社市総社一丁目10番24号

総社市埋蔵文化財発掘調査報告

30

辻遺跡

二〇二一年三月

岡山県総社市